

新作コンペ・エントリーNo.4

『うたのすきなりゅう』
たんぽぽ

『うたのすきなりゅう』

たんぽぽ

キャスト：5～6人（増やすことも可能）

上演時間：たぶん、20分くらい。

登場人物（担当楽器は仮）

おじいさん：笛（オカリナ）

おばあさん（省略可）

ネコ（ハナコ）：ハーモニカ

ハリネズミ：パーカッション

フクロウ：ギター

竜：歌と太鼓

あらすじ

ネコのハナコと釣りに出かけたおじいさんは、昼寝をしているうちに知らない湖に。

おじいさんは竜につかまるが、竜の歌に合わせて笛を吹き気に入られる。

ハナコはハリネズミとフクロウとともにおじいさんを助けに行くが、失敗。

竜とおじいさんが楽しそうに演奏しているのにひかれ、そこに加わる。

一緒に楽しく演奏することで、ともだちになり、みんなでおじいさんの家に帰る。

大雑把なお話

釣りの好きなおじいさん。

おじいさんは、昔、町の音楽隊で働いていましたが、いまは毎日釣りばかり。

今日も飼い猫のハナコと釣りに出かけます。

「行ってくるよ」

「おさかなをいっぱい釣ってきてくださいね」

良い天気。

タロウもおじいさんが釣る魚が楽しみです。

釣り船の中でおばあさんの作ってくれたお弁当を食べたら、お昼寝。

気がついたら、どこか知らない湖です。それでもおじいさんは気にしないで釣りを始めます。

すると、大物の当たりが。

どんどん引っ張られて、船はひっくり返り、おじいさんは水の中に。

ハナコはやっとのことで岸に泳ぎ着きましたが、おじいさんは見当たらず。

しょんぼりと泣きそうになっていると、ハリネズミが現れました。

「どうしたの？」

「おじいさんが、湖に……」

「そりゃ、もうだめかも」

「どうしてそんなこというの」

「あの湖には、おっきな竜が住んでいるんだよ」

「りゅう？」

「そう、おじいさん、食べられちゃったかもね」

「そんなあ、あーん（泣く）」

そこへフクロウが現れる。

「どうしたんだい、猫ちゃん」

「おじいさんが、りゅうに食べられたって……」

「こら、女の子を泣かすんじゃない」フクロウがハリネズミを叱ります。

「ふんっ。最初から泣いていたんだよう」

「心配だなあ。一緒におじいさんを捜しに行こう」

3匹は竜のすみかへ向かいます。

そのころ、竜のすみかでは。

「っり、りゅうだ！ たべないで」

「痛いよう、この針を取ってよう」

「ごめんよ。まさかおまえさんが引っかかるとは」

おじいさんが針を取ってやると、竜も機嫌を直します。

「あー痛かった。あー、あー」（歌い出す）

「良い歌だ」おじいさんは感心します。

「僕、上手？」

「ああ、そうだとも」

「じゃあ、わしも一緒に。さあ、歌って」

竜の歌に合わせて、おじいさんが笛を吹きます。
「楽しいなあ」 竜はご機嫌です。

「どこかから、歌が聞こえる」とフクロウ。
「笛の音も」とハリネズミ。
「おじいさんの笛だ！」
3匹は森の中を急ぐ。竜のすみかにたどり着く。
「おじいさん！」
「ハナコ、無事だったんだね」
「おじいさんも」
「なんだ、おまえたちは」 邪魔をされた竜が怒り出す。
「おじいさん、おばあさんが心配しているよ。帰ろう」
「そ、そうか」
「ダメだ、じいさんは帰さない。じいさんの笛が気に入ったんだ」
竜はおじいさんを放しません。
「そんなあ」
「うるさーい。さっさと帰れーっ」
竜が火を噴き、3匹は逃げ出しました。

「これこれ、そんな乱暴な」「だって……」
「どこにも行かないから、放しておくれ」

竜がおじいさんを放すと、おじいさんはまた笛を吹き始めます。

「楽しいなあ。いままで、ずっと一人だったんだ。もう少し一緒にいてよ」

「ああ、いいとも」

「お腹、空かないか」

「そういえば少し」

「ちょっと待ってろ」

竜がしっぽで水面を打つと、魚が跳びはねてきます。

それに向かって火を吹くと、魚は真っ黒焦げ。

「しまった、やり過ぎた。もう1回」

もう一度。今度は良い焼き加減。おじいさんはそれを葉っぱで受け止めて。

「美味しいのう。ハナコにも食べさせてやりたいなあ」

「ハナコって」

「さっきの猫だよ。わしの友だちなんだ」

「トモダチって」

「一緒にいて楽しい仲間のことさ」

「トモダチ……」

そのころ、竜から逃げてきた3匹は。

おじいさん救出作戦を考えて、再びりゅうのすみかに。

(略)

救出作戦は失敗。

機嫌良く竜が歌い出し、おじいさんが笛を吹く。

「良い歌だなあ」「竜がこんな歌を歌うなんて」

おじいさんが言いました。

「おまえさんたちも、一緒にどうかい」

ハナコとフクロウとハリネズミも加わって、音楽会となる。

(ここはちょっとたっぷりやりたい)

「楽しいなあ」「楽しいねえ」「大勢だともっと楽しくなるねえ」

「いつまでも、こうしていたいなあ」と竜。

「でも、きっとおばあさんが心配しているよ」とハナコ。

おじいさんも、なんだが心配になってきました。

「そうだなあ、いちど帰らないと」

「ええっ。そんなのいやだあ」と竜。

「直ぐにまた会いに来るから」とおじいさんはいいます。

「わしらは、友だちだからな」

「トモダチ」と竜も。

みんな口々に「トモダチ」「トモダチ」。

やがてそれは一つの歌になって。

「ぼく、みんなを送っていくよ。さあ、僕に乗って」

みんな竜の背に乗って。やがて、おばあさんの待つ家に。

「ただいま、おばあさん」

おばあさん、「あらまあ、いっぱいのお客さまだこと」